



ポーランド友好訪問参加者の声

私にとってポーランド友好訪問は自分の人生と平和を考えるきっかけとなった出来事だった。その理由は大きく2つある。

1つ目はアウシュヴィッツ強制収容所への訪問である。あの重々しい空気、妙な静けさ、死の門から続く1本のレール、その全てを包み込む青空と太陽。「命の選別」がされていた場所で感じた感情は他の何にも例えられない、不思議で、恐ろしく、17歳の私には衝撃的なものだった。アウシュヴィッツ強制収容所訪問を通じて、私はあの場所で感じたことをまとめ、国際理解に関する弁論大会に参加することを決めた。原稿を執筆していく上で、自分の生まれ育ったルーツやこれからの人生について考えるようになった。私にはポーランドを訪問する半年前に亡くなった祖父がいる。生前、祖父が話していたことがアウシュヴィッツ強制収容所で感じたことと繋がったのである。祖父は戦争によって学ぶことを奪われ、虐殺されたユダヤ人は人間の尊厳を奪われた。しかし、私は何一つ奪われることなく、生活している。このような状況下において私は、これからの人生、どのように生きていくかを考えずにはいられなくなった。よく「人生は一度きり」という言葉を耳にするが、この時、この言葉の意味を自分なりに理解できたと感じた。私には家族や友達がいて、学校に通うことができ、未来を自分自身で選ぶことができる。これは当たり前のことではなく、恵まれているということを実感するようになったのである。このことから私は、これからの人生を人との時間を大切に、自分のやりたいことに挑戦するということを決意したのである。

2つ目にポーランドの友人たちの人を想い、受け入れる姿である。私たちの友好訪問のきっかけは東日本大震災の際に日本語学校の生徒から送られてきた手紙だった。彼らは他国で起こった出来事に対し、涙を流し、励まし、平安を願ったのである。実際にポーランドを訪問した際には生まれ育った国も、文化も違う私たちを温かく迎え、共に喜び、学び合えた。この姿は互いを想い、受け入れようとする姿は平和を象徴するものであると感じたのである。私の祖父が子どもの頃には国同士が争い、人々が殺し合いをしていた。遠く離れたポーランドでは20世紀最大の悲劇であるアウシュヴィッツ強制収容所で大量虐殺が実行されていた。昨今ではSNSの普及をきっかけに、見えない相手からの心ない言葉で人を傷つけ、苦しんでいる人も見受けられることから、「平和」を感じることはごく少ない。しかし、人は互いを想い、受け入れ合うことで、人は、人の温かさを感じることができる。そして平和を実感することができるのだということポーランドの友人から学んだのである。

友好訪問から6年の歳月が経ち、私は今、中学生の時から夢であった職業に就き、仕事をしている。「人生は一度きり」の通り、自分がやってみたいと心から思ったことを目指したのである。高校生というこれからの人生を深く考え、歩み出そうとしている時期にポーランド友好訪問に参加できたことは私にとって大きな財産である。これからの自分自身で人生の道を切り開き、豊かなものとしていきたい。そして未来を担う子どもたちの笑顔と夢あふる世の中であれと祈りつつ、日々を過ごしていきたい。

(卒業生 武藤 早紀さん)

2015年度 第50回 国際理解に関する弁論大会 国際協力機構東北支部長賞受賞

「世界の平和と安定のために、日本が国連の中で果たすべき役割～笑顔と夢あふる世の中であれ～」

高校Ⅲ年 武藤 早紀

「信じられない・・・。」

私は言葉を失ってしまいました。20 世紀最大の悲劇の現場といわれる、アウシュヴィッツ強制収容所を訪れた時のことです。そこは多くの訪問者でうめつくされていました。いつもとは違う重苦しい空気、妙な静けさに包まれていました。今から 70 年前、ここでは、収容された 150 万人ものユダヤ人が無残にも殺害されたといえます。ナチスドイツによって取り上げられた、ユダヤ人の衣類、じゅうたんを作るためにかりとられた髪の毛は、現在も当時のまま展示されてありました。それらを前にして、私は言葉を失ってしまったのです。戦争から 70 年が経った今でも、なぜ、この場所に多くの人が訪れ、そして、何を思うのでしょうか。

今年の春休み、ポーランド友好訪問にでかけました。東日本大震災の際に、クラクフ日本語学校の生徒から「にほんのともだちへ」と書かれた手紙を受け取り、私たちを励ましてくれる人たちにぜひ会いたいと願うようになりました。プログラムの一環として、アウシュヴィッツを訪れました。そこは重苦しい空気に支配されていました。それまで、温かい笑顔を向けてくれた、ポーランドの友人も突然表情が曇りだしました。現地では、アジア唯一の日本人ガイド中谷剛さんに案内していただきました。中谷さんは、淡々としずかにお話しされていましたが、私の心は冷静ではいられませんでした。第二収容所に着いた時、不思議な感覚に陥りました。見渡す限り広がる青々と生い茂った美しい草地、「死の門」と呼ばれたゲートから中へ続く一本のレール。その全てを包み込む青空とまばゆい太陽が輝いていました。私が立っているこの大地。ここでは、人間の尊厳が奪われ、極限状態の中で、人々は命の選別をされたのです。私は大きな衝撃を受けました。その日、私たちの他に、ポーランド、ドイツ、イスラエルの学生が見学に訪れていました。彼らはこの大地を前に、何を考えていたのでしょうか。

帰国後、アウシュヴィッツで感じた衝撃をレポートにまとめることにしました。その時です。ふと祖父の言葉が脳裏をよぎりました。祖父は、昨年 6 月に 85 歳でこの世を去りました。その祖父が病室で突然重い口を開いたのです。

「私があなたと同じ世代の時に、太平洋戦争が起こった。私は原爆が投下された時、長崎の近くにいた。戦争ではたくさんの人が死んだ。その遺体を焼く作業を手伝わされた。とても嫌でならなかった。」

祖父の体は日ごとに病気にむしばまれていきましたが、くる日も、くる日も、戦争の話をしてくれました。勉強が大好きだった祖父。学校で学びたいという夢をあきらめ、戦地に赴く覚悟をしました。戦争は罪のない子どもたちの未来を奪ったのです。私は子どもたちの笑顔と夢があふれる平和な世界の実現を心から願います。

現在、世論調査によると、国民の 7 割が原爆投下の日を答えられないといえます。現代の日本人は我が国の歴史を他人事として捉えているのではないかと思います。戦後 70 年が経った今でもなぜ多くの人がアウシュヴィッツを訪れるのか。それは、戦争の悲惨さを忘れず、平和への誓いを立てるためではないでしょうか。これまで日本は大きな過ちへの反省とたくさんの尊い命が失われた悲しみから、平和憲法のもと、平和国家として歩んできました。私は、日本は国連において、世界の平和と安定のために、広い視野に立ち、何ができるかを考え行動することが求められると思います。

日本人ガイドの中谷さんが言いました。

「傍観者になってはいけない。私たちは被害者にも加害者にもなる。」

戦争は過去のことではありません。他国で起きていることでもあります。私たちの世界で起きていることなのです。来年の夏から選挙権は 18 歳に引き下げられます。世界に平和と安定をもたらす日本のリーダーを選びましょう。これが、私たちが身近にできる平和への貢献ではないでしょうか。

今、私がここに立ってられるのは、つらい戦争を生き抜き、命をつないでくれた祖父がいたからです。おじいちゃん、ありがとう。私はこの命を大切に生き、次へつないでいきます。私は将来教育関係の仕事に就きたいと思っています。子どもたちの笑顔と夢あふる世の中であれと祈り。